

増養殖技術開発事業 (放流技術) (要旨)

勢村 均・山田 正

生態が異なると考えられる複数種のアワビを放流し、漁場内における生息量の増加を検討するとともに、アカウニ人工種苗放流実験時の基礎資料とする。結果の詳細は「平成3年度日本海ブロック試験研究集録第27号」69～83に公表されているので、ここでは要旨を述べる。

1. 調査方法

箴川郡大社町日御碕の、水深0.5～3.5mの転石場20×20mを調査区域とし、中央部の10×10mを2×2mの25区画に、周辺部を5×5mの12区画にロープで区分した。5月下旬に中央の区画に三重標識を装着したエゾアワビ、クロアワビ、マダカアワビ、メガイアワビを放流した。

調査は放流後1日、2日、8日、16日、70日、105日、210日目に行い、ダイバーは、区画ごとに、発見した放流アワビの種類、番号、位置、付着部位を記録した。同時に、発見したアワビの死殻はすべて持ち帰った。

2. 結果

各調査日におけるアワビの発見率は16日目から70日目にかけて急激に低下した。死殻の累積発見率は逆に上昇した。これらの値は種により異なったが、同種でも生産地により異なった。

また、放流個体のうち調査中に標識番号が確認された割合は70～96%の間であり、マダカアワビが最も高く、メガイアワビ(坂田系)が最も低かった。発見後、不明となった個体の割合はメガイアワビ(坂田系)が最も高かった。

調査区域内での分散は、エゾアワビ、クロアワビ(隠岐系)、メガイアワビ(坂田系)で大きく、その他で小さかった。

生息場所はクロアワビ、メガイアワビが主として転石下面であったのに対して、マダカアワビ、エゾアワビは転石下面の占める割合が低かった。

死殻にはマダコによる穿孔が観察され、その割合はエゾアワビで高く、クロアワビで低かった。

以上、アワビの放流後の生残りの割合は、種によっても異なったが、同種でも生産地(=生産、管理方法)によって大きく異なった。この原因は、生産、管理方法の違いに由来する稚貝の活力の程度にあると考えられる。